# 京都府北部における古代の集落

森下　衛

## 1．はじめに

近年、発掘調査例の増加に伴い、京都府北部(丹後・中丹[注1])における古代(奈良～平安時代)の集落に関する資料も徐々に蓄積されてきた。本稿では、こうした京都府北部における古代集落の様相を概観してみたい。ただし、調査範囲の関係や遺構の遺存状況といったさまざまな制約もあり、各遺跡において全体の様相が明らかとなっているとは言いがたい。こうした資料的な制約に関しては、今後の資料増加を待つこととし、ここでは現状のなかで、幾つかの検討を行うものである。

## 2．主な調査事例

京都府北部における奈良・平安時代の集落跡に関する調査事例を第1表に示した(一部、飛鳥時代・平安時代後期～鎌倉時代の状況を含む)。ここには遺跡の存続時期、住居形態の別、主な特徴などを示している。本章では、京都府北部地域を丹後・中丹(北丹波)の2地域に分け、主な集落跡について概観する。なお、記述にかかる主要な集落跡に関する建物構成などについては第2表にまとめている。

### (1)丹後地域

丹波地域の古代集落跡の分布は、大きく海浜部と内陸部に分かれる。

海浜部において集落跡の分布が顕著に認められるのは、現在は埋没しているものの、各河川の河口部に形成されていた潟湖周辺の海岸段丘及び微高地上などである。久美浜町こくばら野遺跡・同日光寺遺跡・網野町横枕遺跡・同浅後谷南遺跡・丹後町岩木遺跡・宮津市中野遺跡・同宮村遺跡などがこれにあたる。うち、建物跡などの遺構が良好に確認されている遺跡は、こくばら野遺跡・日光寺遺跡・浅後谷南遺跡などである。

こくばら野遺跡は、久美浜湾を望む海岸段丘上に立地する7世紀末葉から8世紀中葉の集落跡で、11基の竪穴住居跡並びに15棟の掘立柱建物跡が確認されている。7世紀末葉に竪穴住居による集落として出現し、8世紀初頭～中葉にわたって掘立柱建物による集落が営まれた。掘立柱建物跡は、その主軸からⅠ～Ⅴ群に分類されているが、その変遷過程等

## 第１表　奈良～平安時代の集落遺跡一覧

| | | | 7世紀 | | 8世紀 | | 9世紀 | | 10世紀 | | 11世紀 | | 12世紀 | | 13世紀 | | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 | |
| 1 | こくばら野遺跡 | 久美浜町 | | ○ | ● | | | | | | | | | | | | ２×３間の掘立柱建物跡と竪穴住居群 |
| 2 | 日光寺遺跡 | 〃 | | | ● | ● | | | | | | | | | | | ２×５間の大型掘立柱建物跡あり |
| 3 | 岩木遺跡 | 〃 | | | | ● | | | | | | | | | | | 円面硯出土 |
| 4 | 遠所遺跡 | 弥栄町 | ○ | ◎ | ◎ | ◎ | | | | | | | | | | | 製鉄遺跡 |
| 5 | ニゴレ遺跡 | 〃 | | ◎ | ◎ | ◎ | | | | | | | | | | | 製鉄遺跡 |
| 6 | 黒部遺跡 | 〃 | | | | ― | ― | | | | | | | | | | 製鉄遺跡 |
| 7 | 横枕遺跡 | 〃 | | | | | | ― | ― | | | | | | | | 緑釉陶器多数出土 |
| 8 | 浅後谷遺跡 | 網野町 | | | | ● | ● | ● | ● | | | | ― | ● | ― | | 平安時代の木簡、八稜鏡など出土 |
| 9 | エノボ横穴群 | 大宮町 | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | 横穴前部に竪穴式住居 |
| 10 | 裾谷横穴群 | 〃 | ○ | ◎ | ◎ | | | | | | | | | | | | 緩斜面に掘立柱建物跡と竪穴式住居 |
| 11 | 正垣遺跡 | 〃 | | | | ● | ● | ● | ● | | | | | | | | 有力者の居宅か |
| 12 | 上野遺跡 | 〃 | | | ● | ● | | | | | | | | | | | 布掘りの柱列 |
| 13 | 松田遺跡 | 〃 | | | ― | ― | | | | | | | | ● | ● | | 流路跡から多量の木製品 |
| 14 | 枯木谷遺跡 | 〃 | | | | ● | ― | | | | | | | | | | 倉庫建物と墨書土器ほか |
| 15 | 幾坂遺跡 | 〃 | ○ | | | | | | | | | | | | | | 横穴前部に竪穴式住居 |
| 16 | 中上司遺跡 | 加悦町 | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | | ● | ● | | |
| 17 | 蔵ケ崎遺跡 | 〃 | | | ― | ― | | | | | | | | | | | 水田跡 |
| 18 | 定山遺跡 | 岩滝町 | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| 19 | 中野遺跡 | 宮津市 | | | | ― | ● | | | | | | | ● | ● | | 国分尼寺推定地 |
| 20 | 宮村遺跡 | 〃 | | | | | ● | ● | | | | | | | | | 倉庫風建物と施釉陶器 |
| 21 | 高川原遺跡 | 大江町 | ○ | | | | | | | | | | | | | | 由良川自然堤防上の集落 |
| 22 | 三河宮ノ下遺跡 | 〃 | ○ | | | | | | | | | | | | | | 由良川自然堤防上の集落 |
| 23 | 浦入遺跡 | 舞鶴市 | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | | | 製塩遺跡 |
| 24 | 志高遺跡 | 〃 | | ○ | ○ | ● | ● | | | | | | | | | | 由良川自然堤防上の集落 |
| 25 | 桑飼上遺跡 | 〃 | | ○ | ● | ● | ● | | | | | | | | | | 由良川自然堤防上の集落 |
| 26 | 倉谷遺跡 | 〃 | | ◎ | ● | ● | ― | ― | ● | ● | | | | | | | |
| 27 | 桑飼下遺跡 | 〃 | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| 28 | 上ケ市遺跡 | 福知山市 | | | | ● | ● | ● | ● | | | | ● | ● | ● | | 大型の南北棟建物跡 |
| 29 | 庵我遺跡 | 〃 | | | | ● | ● | | | | | | | | | | ２×３間の建物跡で構成 |
| 30 | 石場遺跡 | 〃 | | | | ● | ● | | | | | | | | | | ２×３間の建物跡で構成 |
| 31 | 多保市遺跡 | 〃 | | | ○ | | | | | | | | | | | | ８世紀前半の竪穴式住居 |
| 32 | 綾中遺跡 | 綾部市 | ○ | ◎ | ◎ | ― | | | | | | | | | | | 郡衙推定地 |
| 33 | 青野遺跡 | 〃 | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | | ● | ● | | |
| 34 | 味方遺跡 | 〃 | | ○ | ● | | | | | | | ● | | | | | |
| 35 | 小西町田遺跡 | 〃 | | | | ● | ● | ● | ● | ● | | | | | | | |
| 36 | 里遺跡 | 〃 | | | ― | ● | | | | | | | | ● | ● | | 廂付きの東西棟建物あり |
| 37 | 久田山遺跡 | 〃 | ○ | | | | | | | | | | | | | | |
| 38 | 高倉遺跡 | 〃 | | | ― | ― | | | | | | | | | | | 高倉神社(式内社)関連か |

○　竪穴住居による集落　　◎竪穴住居と掘立柱建物による集落

●　掘立柱建物による集落　　―遺物のみ出土している

については、不明な点が多い。なお、ここに示したように掘立柱建物跡は規模的に類似したものが多い(20～25㎡)が、柱間などの特徴から大きく2種類に分けられる。桁行の柱間が、1.5m前後のものと1.8～2mのものである。この両者に使用形態に差異があったのか明らかでないが、調査区内で倉庫建物と判断される総柱建物が確認されていない点からすれば、どちらかが倉庫として使用されていた可能性もあろう。

日光寺遺跡は、こくばら野遺跡の北方約1.3km、同様に久美浜湾を望む段丘上に立地する古墳時代～平安時代の集落跡である。調査範囲が限られていたため、集落跡の全容が確認されているとは言いがたいが、調査区南半部で奈良時代頃の5間×2間の大型建物跡(50㎡前後)、北半部で2間×3～4間(30㎡前後)の小規模な建物跡3棟などが検出されている。

浅後谷南遺跡は、やや内陸部に位置するが、かつては離湖が近隣まで及んでいたとされる。丘陵裾の微高地上に立地し、奈良時代後半から平安時代の掘立柱建物跡が12棟以上確認されている。なかでも平安時代の遺構は、整地によって造成された平坦面を利用して設けられているほか、出土遺物に緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯系青磁、八稜鏡、木簡などが認められたことから、単なる一般集落とは様相を異にする。

一方、内陸部は集落立地に適した微高地が少ない。内陸部を流れる各河川はその縁辺に集落立地に適した自然堤防などの微高地を発達させておらず、丘陵裾の狭小な微高地や、わずかに認められる河岸段丘上に集落が散在するといった状況である。ただし、遺跡の多くは、近辺を流れる小河川の流路変更などにともない削平等を受け、遺存状況の極めて悪いものが多い。内陸部に位置する集落跡には、大宮町正垣遺跡・同上野遺跡・同菅外遺跡・同松田遺跡・同枯木谷遺跡・同幾坂遺跡・加悦町中上司遺跡・同蔵ヶ崎遺跡・岩滝町定山遺跡などのほか、横穴墓群周辺の丘陵裾に立地する遺跡がある。うち、上述のとおり遺存状況の良好なものは少なく、建物跡などの遺構が比較的良好に確認されているのは、正垣遺跡・上野遺跡・裾谷遺跡(裾谷横穴周辺)などを認めるにすぎない。このほか、弥栄町に分布する製鉄関連遺跡として、遠所遺跡・ニゴレ遺跡・黒部遺跡などがあるが、これらからは工房もしくは工人等の住居と思われる竪穴住居跡及び掘立柱建物跡などが確認されている。

正垣遺跡は、奈良時代末葉から平安時代後期にわたる時期の掘立柱建物跡が20棟確認されている。建物跡は3か所のトレンチにわたって検出されているが、最も集中しているのは第4トレンチである。ここでは、トレンチ北半と南半の2か所に集落が並存しつつ4期にわたって変遷しており、うち第Ⅰ～Ⅲ期が奈良時代末から平安時代前期に相当する。両者とも集落の全域が明らかになっているわけではないが、掘立柱建物跡2～3棟が各期存在している。なかでも、北半の第2期には東面に廂を付す南北棟建物(復元で40～50㎡)や

その建物群の南辺を区画する柵列などが確認されており、有力者の居宅と想定されている。

上野遺跡は、正垣遺跡から南方約600ｍの段丘縁辺に立地する。２か所に設けられた調査区の一方で布掘りの柱穴による大規模な柵列が２条検出されており、その北西側につづく段丘上方部に官衙的な施設の広がりが想定される。またこれに重複して、２間×３～４間の掘立柱建物跡が数棟確認されているが、布掘りの柵列が廃絶して以降（奈良時代末葉以降）のものである。

裾谷遺跡は、７世紀初頭～８世紀中葉を中心に営まれた竪穴住居と掘立柱建物[注3]とが並存した集落跡である。横穴墓が営まれた丘陵裾の狭小な緩斜面を利用し、３～４基の竪穴住居とともに１～２棟の掘立柱建物跡が３～４期にわたって存続した。なお、この裾谷遺跡などのように横穴群に近接して確認される集落跡については、平地部が限られるといった地理的な環境のなか、当地域で、比較的多く営まれていた集落形態として理解される。

**(2) 中丹地域**

この地域は、丹波地域のなかでもその北半部、由良川流域に相当する地域である。各集落の立地に関してみると、由良川の形成した自然堤防上に立地する遺跡（舞鶴市志高遺跡・同桑飼上遺跡など）、由良川に面する段丘上に立地する遺跡（福知山市上ヶ市遺跡・同庵我遺跡・綾部市里遺跡など）、由良川の支流に面する微高地上に存在する遺跡（福知山市石場遺跡・綾部市小西町田遺跡・同高倉遺跡など）などがある。うち、建物跡などが良好に確認されているのは、志高遺跡・桑飼上遺跡・上ヶ市遺跡・庵我遺跡・石場遺跡・里遺跡・小西町田遺跡などである。

志高遺跡では、８世紀前半頃まで竪穴式住居による集落が存在した後、８世紀中葉～９世紀初頭頃の間に３期にわたって掘立柱建物による集落が営まれた（報告ではⅡ～Ⅳ期）。このうち、Ⅱ・Ⅲ期は２間×３～４間の側柱建物２～３棟（30～40㎡）と倉庫建物１棟（10㎡前後）による集落が展開していたようだが、Ⅳ期（奈良時代末～平安時代初頭）には、２間×５間の中心的な東西棟建物（40㎡強に復元）を中心にその周囲に２～３棟の側柱建物（30～40㎡）や倉庫建物（16㎡前後）が付随するといった規模の大きな集落へ様変わりする。

桑飼上遺跡も竪穴式住居による集落が存在した後、８世紀前半～末葉にわたって掘立柱建物による集落が営まれ、４～５期（Ａ～Ｅ群）にわたる変遷が考えられている。うち第２期に想定されている建物群（Ｂ群）は、廂を有する（もしくは柵列に囲まれる）東西棟建物（身舎で40㎡強に復元、廂を入れると４間×６間で60㎡以上）を中心に、その周囲に倉庫を含め５棟の建物（30～40㎡）を配置することが確認されており、有力者の居宅と理解される。

上ヶ市遺跡は、奈良～鎌倉時代にわたって、大規模な掘立柱建物跡が連綿と営まれた注目すべき遺跡である。詳細は未報告のため、略報の概略図から検討を行ったところ、奈良

時代後半から平安時代前期までの間に、おおむね4群程度の建物群が時期を違えて営まれたことが復元される。ここで目立つのはやや大型の部類に入る4間×2間の南北棟建物(面積が40㎡強)の存在である。こうした建物が均質に4棟程度設けられた段階(A群と仮称)、これにさらに大型の廂を付した建物(6間×2間で東面に廂を付した南北棟建物)が併設された段階(B群)、こうした建物1棟にやや規模の小さな建物1～2棟(30㎡前後)と倉庫建物1～2棟(15㎡前後)が付随する段階(C・D群)などが想定される。ただし、その前後関係は不明である。

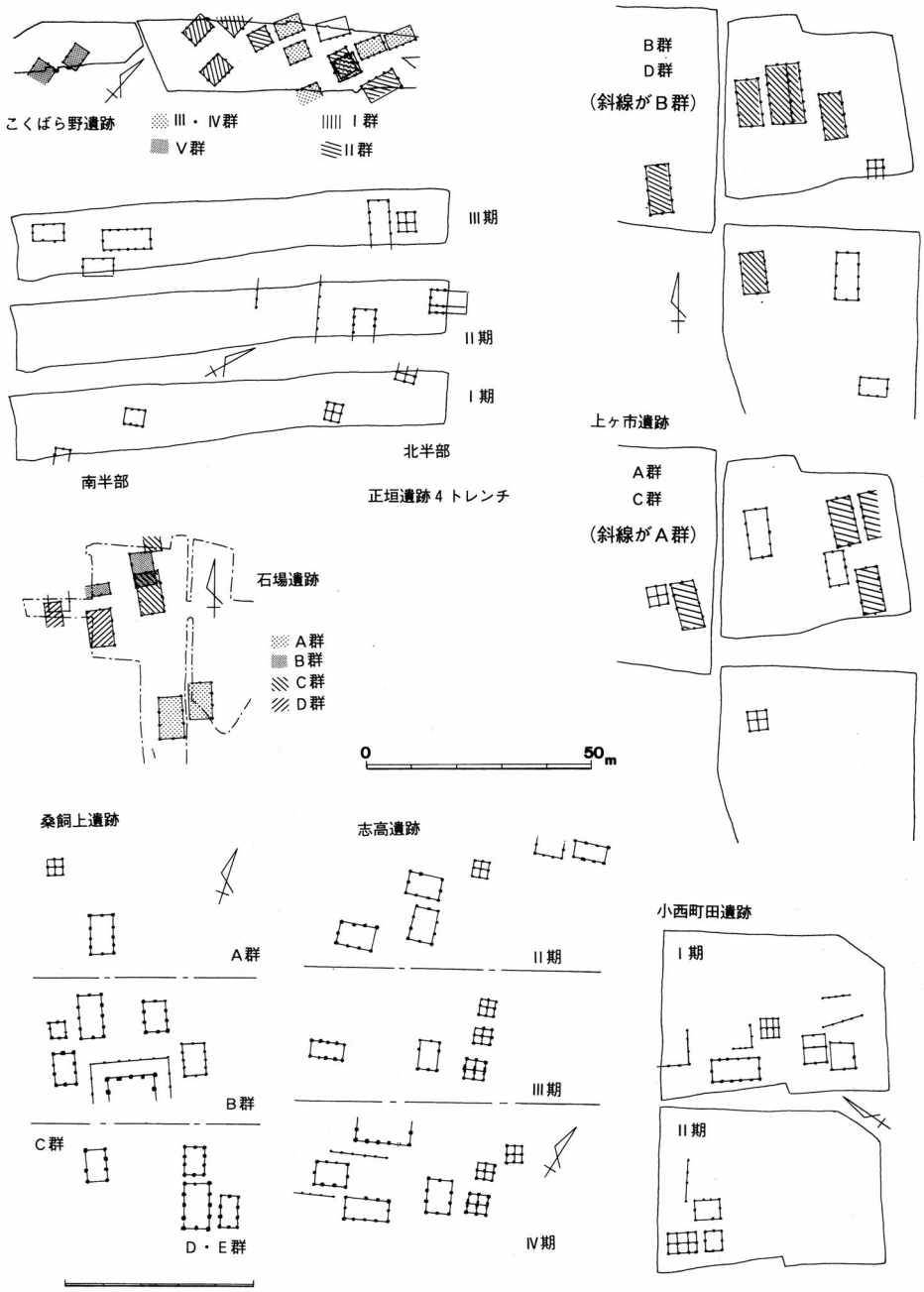
石場遺跡は、基本的に2間×3間(30～40㎡)の側柱建物によって構成されている。総数で9棟の掘立柱建物跡が確認されているが、うち7棟がこうした建物である。その主軸方向などから、3～4期にわたるものと考えられ(ここでは仮にA～D群に分けた)、一時期に存在したのは2棟前後であったと考えられている。庵我遺跡もこれに類似した集落跡で、調査範囲が限られているため同一時期の建物群を抽出するのは難しいが、2間×3間の側柱建物2棟(30～40㎡)に、総柱の倉庫建物1棟(15㎡前後)が付随するといった建物群の単位が2～3期存在したものと考えられる。

小西町田遺跡は、8世紀後半から12世紀までの長期にわたって建物跡が確認されている(Ⅰ～Ⅳ期)。うち、ここでは8世紀後半から9世紀頃の建物群(Ⅰ期とⅡ期の一部)についてみてみると、8世紀後半(末葉に近い時期か)には、5間×2間の東西棟建物(約50㎡)に2間×2～3間(30㎡前後)の側柱建物2棟や倉庫建物(15㎡前後)が付随する建物群が設けられ(Ⅰ期)、その後、2間×3～4間の側柱建物2棟(20㎡前後)と総柱の倉庫建物1棟(30㎡強)が営まれた(Ⅱ期)。

## 3．古代集落の展開

### (1)集落の存続時期

第1表にみるとおり、丹後地域では7世紀後半～8世紀前半の間に、徐々に住居の構造が竪穴住居から掘立柱建物へ変化したようである。良好にこうした状況を確認できる調査例は少ないが、こくばら野遺跡で8世紀初頭頃に掘立柱建物による集落が出現しており、また裾谷遺跡では7世紀後半～8世紀前半にわたり竪穴住居と掘立柱建物が並存した状況が確認されている。ここでは7世紀後半頃から掘立柱建物が居住建物として使用されはじめ、遅くとも8世紀中葉頃にはほぼすべて居住建物として定着したものととらえておきたい。一方で、竪穴住居を主体とする集落の多くが、この頃を境に廃絶する状況や、新たに8世紀前半(中葉に近い時期)に掘立柱建物による集落が多数出現しているといった傾向も指摘できる。この時期、居住建物の変化とともに、集落の設営に関しても大きく変化したようで


こくばら野遺跡
Ⅲ・Ⅳ群
Ⅰ群
Ⅴ群
Ⅱ群
Ⅲ期
Ⅱ期
Ⅰ期
南半部
北半部
正垣遺跡４トレンチ
B群
D群
（斜線がB群）
上ヶ市遺跡
A群
C群
（斜線がA群）
石場遺跡
A群
B群
C群
D群
0
50m
桑飼上遺跡
A群
B群
C群
D・E群
志高遺跡
Ⅱ期
Ⅲ期
Ⅳ期
小西町田遺跡
Ⅰ期
Ⅱ期

第１図　主要遺跡遺構図

ある。

集落の廃絶に関してみてみると、8世紀(中葉もしくは後半)に営まれはじめた集落は、9世紀初頭までという比較的短期間(40～50年程度)で廃絶する一群と、10世紀初頭頃まで(100～150年程度)営まれ続ける一群の、大きく二者があるようだ。なお、参考として、第1表には12～13世紀の状況も示しているが、10世紀後半から11世紀にわたる時期は、他にも集落跡はほとんどなく、空白期の呈をなす。この時期、集落がどこに営まれたのか現状ではまったく不明といわざるをえない。

中丹地域では、居住建物が竪穴住居から掘立柱建物へと変化したのは、8世紀初頭～前半頃と考えられ、丹後地域のように竪穴住居と掘立柱建物が並存する状況は、現状では認められない。竪穴住居から掘立柱建物への変遷を確認できるのは、志高遺跡や桑飼上遺跡などで、8世紀初頭ないしは前半まで竪穴住居が営まれており、その直後に掘立柱建物による集落が成立しているようである。なお、何鹿郡衙と推定されている綾中遺跡では、すでに7世紀後半には、大型の掘立柱建物群が営まれている。一方、浦入遺跡(製塩遺跡)では、緩斜面に工房もしくは工人の居住地としての竪穴住居が営まれ続けており、その状況は、丹後地域の製鉄関連遺跡群と類似している。また、やはり7世紀後半から8世紀前半には、竪穴住居による集落(高川原遺跡・三河宮の下遺跡・味方遺跡・青野遺跡・久田山遺跡)の多くが廃絶し、8世紀前半(中葉に近い)には新たに掘立柱建物による集落が出現する傾向がみてとれる。ただし、上述のように志高遺跡や桑飼上遺跡などは例外で、これらは7世紀後半頃から営まれはじめ、以後、9世紀初頭まで継続する。

集落の廃絶に関してみてみると、7世紀後半段階から継続する遺跡や8世紀(中葉もしくは後半)に営まれはじめた集落も、限られた数遺跡を除く大半が9世紀前半には廃絶するようである。ここには、7世紀後半から9世紀前半までの100～150年程度存続する一群と、8世紀(中葉もしくは後半)から9世紀初頭までという比較的短期間(40～50年程度)で廃絶する一群の、大きく二者が認められることとなる。なお、これ以外に第三者として、10世紀段階まで存続する遺跡も数か所認められる(上ヶ市遺跡や小西町田遺跡など)。現状では、これらは荘園に関係する遺跡ではないかと考えられている。また、丹後地域と同様に、一定の空白期といえる時期がここにも存在する。9世紀前半に多くの集落が廃絶した後、11世紀にわたる期間には新たに営まれた集落はほとんど認められない。

### (2)建物構成と遺跡の特質

第2表によると、各集落単位では様々な建物構成が認められる。これらを整理すると、以下のとおりとなる。

第２表　主要遺跡建物構成一覧

| | | | 側柱建物 | | | | | | | 総柱建物 | | | | 類型 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 特 | A | B | C | D | E | 不明 | a | b | c | 不明 | |
| | | | 50m² 以上 廂付 | 50m² 前後 | 40～45m² | 30～39m² | 20～29m² | 20m² 未満 | | 20m² 以上 | 15m² 前後 | 10m² 前後 | | |
| こくばら野遺跡 | Ⅰ群 | 7世紀初頭～8世紀中葉 | | | | 2 | | | 1 | | | | | B |
| | Ⅱ群 | | | | 1 | | 2 | | | | | | | B |
| | Ⅲ・Ⅳ群 | | | | | 1 | 4 | | | | | | | B |
| | Ⅴ群 | | | | | | 1 | | 1 | | | | | B |
| 日光寺遺跡 | Ⅰ群 | 8世紀前半～8世紀中葉 | | | | 2 | | | | | | | | B |
| | Ⅱ群 | | | | | 1 | | | | | | | | A |
| | Ⅲ群 | | | 1 | | | | | | | | | | A |
| 正垣遺跡 4トレンチ北半 | Ⅰ期 | 8世紀末 | | | | | | | | | 2 | | | B |
| | Ⅱ期 | 9世紀初頭 | 1 | | 1 | | | | | | | | | C |
| | Ⅲ期 | 9世紀前半 | | | 1 | | | | | | 1 | | | D |
| 正垣遺跡 4トレンチ南半 | Ⅰ期 | 8世紀末 | 1 | 1 | | | | | | | | | | C |
| | Ⅱ期 | 9世紀初頭 | | | | | | | | | | | | なし |
| | Ⅲ期 | 9世紀前半 | 1 | | 1 | | | 1 | | | | | | C |
| 志高遺跡 | Ⅱ期 | 8世紀中葉 | | | | 3 | | | | | | 1 | | E |
| | Ⅲ期 | 8世紀後半 | | | | | 2 | | | | | 1～2 | | E |
| | Ⅳ期 | 8世紀末 | | 1 | | 3 | | | | | 1～2 | | | F |
| 桑飼上遺跡 | A群 | 8世紀前半～8世紀末葉 | | | 1 | | | | | | 1 | | | D |
| | B群 | | 1 | 1 | | 3 | | | | | 1 | | | F |
| | C群 | | | | | 1 | | | | | | | | A |
| | D・E群 | | | 1 | | 2 | | | | | | | | E・A |
| 上ケ市遺跡 | A群 | 8世紀～9世紀 | | 4 | | | | | | | | | | B |
| | B群 | | 1 | 4 | | | | | | | | | | C |
| | C群 | | | 1 | | 1 | | | | | 2 | | | E |
| | D群 | | | 1 | | 1 | | | | | 1 | | | E |
| 庵我遺跡 | | 8～9世紀 | | | 1 | 1 | | | | | 1 | | | E |
| 石場遺跡 | A群 | 8世紀～9世紀 | | | 2 | | | | | | | | | B |
| | B群 | | | | | 1 | | | | | | | | A |
| | C群 | | | | | 1 | | | 1 | | | | | D |
| | D群 | | | | | 1 | | | 1 | | | | | D |
| 小西町田遺跡 | Ⅰ期 | 8世紀後半 | | 1 | | 2 | | | | | 1 | | | F |
| | Ⅱ期 | 9世紀 | | | | 1 | 1 | | | 1 | | | | E |

A　明確な倉庫(総柱建物)を伴わず２間×３～４間の側柱建物１棟のみで構成される集落。日光寺Ⅱ群、桑飼上遺跡Ｃ群、石場遺跡Ｂ群などがこれに相当するが、石場遺跡Ｂ群は側柱建物が倉庫として使用されていた可能性が高い。

B　明確な倉庫(総柱建物)を伴わず、２間×３～４間の側柱建物２～４棟で構成される集落。こくばら野遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ群、日光寺遺跡Ⅰ群、正垣遺跡４トレンチ北半Ⅰ期、上ヶ市遺跡Ａ群、石場遺跡Ａ群などがこれに相当するが、こくばら野遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ群では側柱建物が倉庫として使用されていた可能性が、また上ヶ市遺跡Ａ群、石場遺跡Ａ群などは調査区外に倉庫建物が存在した可能性が高い。なお、こくばら野遺跡Ⅱ群は、これを構成

する２棟の建物の間で約40㎡と約25㎡という明確な差異が認められる。

Ｃ　明確な倉庫(総柱建物)を伴わず、規模の卓越した中心建物に２間×３～４間の側柱建物数棟が付随する集落が認められる。正垣遺跡４トレンチ北半Ⅱ期、正垣遺跡４トレンチ南半Ⅰ・Ⅲ期、上ヶ市遺跡Ｂ群などがこれに相当する。

Ｄ　２間×３～４間の側柱建物１棟、倉庫建物１棟の計２棟の建物によって構成される集落。桑飼上遺跡Ａ群などがこれに相当する。

Ｅ　２間×３～４間の側柱建物２～４棟、倉庫建物１～２棟によって構成される集落。志高遺跡Ⅱ・Ⅲ群、上ヶ市遺跡Ｃ・Ｄ群、庵我遺跡、小西町田遺跡Ⅱ期などがこれに相当するが、うち上ヶ市遺跡Ｃ・Ｄ群、庵我遺跡、小西町田遺跡Ⅱ期は、構成される側柱建物に規模の大小の差異(40㎡前後と30㎡前後)が認められ、中心建物(主屋)を認識できる。

Ｆ　規模の卓越した中心建物の周囲に２間×３～４間の側柱建物２～４棟と倉庫建物１～２棟が配置される集落。志高遺跡Ⅳ期、桑飼上遺跡Ｂ群、小西町田遺跡Ⅰ期などがこれに相当する。

以上、不明な点も多々あるが、ここには大きくみてＡ～Ｆの６ランク、細かくみれば８ランク以上の集落単位の諸形態が認められることとなる。単純にみれば、まず、明確に倉庫と認識される総柱建物を伴うものとそうでないものの二者が認められる。また、集落を構成する建物としては、20～40㎡の面積を有す側柱建物が居住建物(注4)としての主体をなし、その数が増加することや、これに面積の大きな建物(40～50㎡)が併設されることにより、より規模の大きな集落として認識できるといった点が確認される。

さて、倉庫建物の有無(注5)、さらに多・少が認められる点は、集落毎に貧富の差が生じていることを、居住建物に多・少が認められる点は、集落毎に居住者の多・少があったことをそれぞれ示している。また、構成建物に大・小が認められる点は居住者の階層分化が進行していたことを示すものと考えられ、これを集落毎にみれば大型の建物によって構成される集落は社会的に上位の階層の居住が想定されるだろう、あるいは集落内においてみれば居住者間での階層分化、すなはち、家父長とよばれ立場の存在が想定されることとなろう。このことは、畿内の古代集落を整理された広瀬和雄氏の言を借りれば(注6)、倉庫の有無からみてとれる「古代家族(集落居住者)」間の優劣、古代家族(集落居住者)の多寡からみてとれる「単婚家族」と「複合家族」・「拡大家族」の存在、中心建物の存在形態からみてとれる家父長制の進展度といった諸点に共通する。

なお、こうした意味で最も発展性が認められることとなる大規模な集落(ＥやＦ)が、志高遺跡のように集落変遷のなかの最終形態として認められる場合が普遍的とは言いがたい。桑飼上遺跡などでは、一時期に大型化した集落形態が、その後には縮小してしまう様相が

認められるのである。このことは、一律にすべての集落あるいは集落居住者が、発展的成長を遂げたとはいえず、複雑に発展や没落をくりかえしたことを示唆している。

## ４．小結　－集落の変遷と社会情勢－

和銅６年、丹波国から丹後国が分国された。また、７世紀後半～末葉の郡(評)衙の成立、８世紀中葉(天平年間)を中心とした国府の整備といった律令制による政治体系の整備は、全国的にみても確実に各地に浸透していったものと思われる。こうした社会の動きが、ここにみた集落跡にどの程度の影響を及ぼしていたのだろうか。

すでに指摘してきたとおり、ここ京都府北部においては、７世紀末葉頃から８世紀中葉頃の間に竪穴住居を主体とする集落の廃絶、掘立柱建物による集落の出現といった様相が認められ、集落の営みが大きく変化した時期に相当してことが改めて確認された。丹後地域においては、近年調査された横穴墓群でも８世紀中葉を境に造営が停止されたことが確認されている。この時期、当地の人々の生活様式さらには精神生活といった様々な面で、大きな変革が訪れたことは間違いないようである。(注7)

こうした点は、７世紀前半頃に大きな変革期を迎えた畿内地域とは大きな差異を認める。様々な政策によって急激に社会変革を迎えた畿内とは異なり、畿内に隣接するとはいえ、当地においては、きわめて緩やかに律令社会へと変化していった状況が認められる。ただしこれも、８世紀中葉には急変した。集落の様相も墳墓の様相も一変したのである。このことは、国府の設置などを背景に、実質的な律令制が急激に浸透したことを示すのだろう。一方、主な集落跡における建物構成を検討した結果では、各集落居住者の発展・成長状況を示す様々な集落形態が認められた。そして、そこから読み取れる集落の変遷は極めて複雑と言え、発展・没落を遂げていったことが確認された。しかし、その一部は在地の有力者として確実に成長し、やがて平安時代には律令体制を崩壊する社会情勢を形作っていったのであろう。

なお、本稿は、当調査研究センターの共同研究「京都府内における奈良・平安期の集落構造に関する基礎的研究」による研究成果を大いに参考としている。共に共同研究に参加している柴　暁彦調査員には資料収集の面で大変お世話になった。記して感謝申し上げる。

（もりした・まもる＝当センター調査第１課資料係主任調査員）

注１　ここでは、京都府北部ということで、現在の丹後・中丹地域を対象とする。また、古代の集落としたが、時期的には７世紀末葉～９世紀を対象として論を進める。

注2　各遺跡の概要に関しては、参考文献として掲げた下記文献による。

注3　ここで掘立柱建物跡としているのは、斜面を削って平坦面を作り出し、そこに柱列が設けられていることから判断されているものである。同様の形態をなすものとして、山陰方面(鳥取・島根)の丘陵上で確認される掘立柱建物跡がある。また、同様の集落形態は、後述する住居の形態が掘立柱建物へと移行した8世紀段階以降も、遠所遺跡・ニゴレ遺跡・黒部遺跡などの製鉄関係遺跡を中心とする工人の住居ないしは工房関連施設の中にも認めることができ、限られた生活範囲の中に建物を営むひとつのパターンとして存続したものと思われる。

注4　同じ2間×3～4間の居住建物でも、20～40㎡という面積の差異が認められる。大まかにみて、8世紀前半～中葉を中心とするこくばら野遺跡や日光寺遺跡など古いものに小型の掘立柱建物跡が多く、8世紀末葉～9世紀初頭のへと新しくなるにつれ30～40㎡のものが増える傾向がみとめられる。

注5　なお、倉庫の有無に関しては非常に扱いが難しい。調査区外に倉庫建物が存在したため確認できていない場合や、一般に倉庫とみなされない側柱建物のなかに倉庫として使用されたものがある場合などが想定されるからである。

注6　広瀬和雄「畿内の古代集落」(『国立歴史民族博物館研究報告』 第22集　国立歴史民族博物館) 1989

注7　極めて遺憾ながら、本文中の記述で7世紀後半～8世紀前半という時間的な概念は、非常にあいまいとなっている。当地域に限らず7世紀中葉～8世紀前半の土器編年については、各地域ごとの特色が存在するようであり、今後の検討次第によっては、現状で把握しているものとは異なってくる可能性もある。

**参考文献**


こくばら野遺跡　京都府遺跡調査概報　第49冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1992

日光寺遺跡　京都府遺跡調査概報　第37冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1992

岩木遺跡　丹後町文化財調査報告　第4集　丹後町教育委員会　1989

遠所遺跡　京都府遺跡調査報告書　第21冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1997

ニゴレ遺跡　京都府遺跡調査概報　第71冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1996

黒部遺跡　京都府遺跡調査概報　第65冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1995

横枕遺跡　京都府遺跡調査概報　第82冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1998

浅後谷南遺跡　京都府遺跡調査概報　第93冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　2000

エノボ横穴　埋蔵文化財発掘調査概報(1995)　京都府教育委員会　1995

裾谷横穴　京都府遺跡調査概報　第65冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1995

正垣遺跡　京都府遺跡調査概報　第22冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1987

上野遺跡　京都府遺跡調査概報　第37冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1990

松田遺跡　埋蔵文化財発掘調査概報(1994)　京都府教育委員会　1994

枯木谷遺跡　京都府遺跡調査概報　第71冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1996

幾坂遺跡　埋蔵文化財発掘調査概報(1995)　京都府教育委員会　1995
中上司遺跡　加悦町文化財調査報告　第２集　加悦町教育委員会　1979
蔵ヶ崎遺跡　京都府遺跡調査概報　第54冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1993
定山遺跡　京都府遺跡調査概報　第54･66冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1993・1995
中野遺跡　宮津市文化財調査報告　第２・３・５・７集　宮津市教育委員会　1980～1983
宮村遺跡　宮津市文化財調査報告　第14集　宮津市教育委員会　1988
高川原遺跡　大江町文化財調査報告　第１集　大江町教育委員会　1975
三河宮ノ下遺跡　京都府遺跡調査概報　第２冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1982
浦入遺跡　京都府遺跡調査概報　第80･85冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1997・1998
志高遺跡　京都府遺跡調査報告書　第12冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1989
桑飼上遺跡　京都府遺跡調査報告書　第19冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1993
上ヶ市遺跡　福知山市文化財調査報告書　第21集　福知山市教育委員会　1993
庵我遺跡　福知山市文化財調査報告書　第19集　福知山市教育委員会　1991
石場遺跡　福知山市文化財調査報告書　第26集　福知山市教育委員会　1994
多保市遺跡　京都府遺跡調査報告書　第10冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1988
綾中遺跡　綾部市文化財調査報告　第８・９集　綾部市教育委員会　1981・1982
青野遺跡　綾部市文化財調査報告　第８・９集　綾部市教育委員会　1981・1982
味方遺跡　京都府遺跡調査概報　第18冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
綾部市文化財調査報告　第19集　綾部市教育委員会　1993
小西町田遺跡　京都府遺跡調査報告書　第18冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1993
里遺跡　京都府遺跡調査概報　第41冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1991
久田山遺跡　綾部市文化財調査報告　第５集　綾部市教育委員会　1979
高倉遺跡　綾部市文化財調査報告　第20集　綾部市教育委員会　1994